

Title	あこのころの三田社会学
Sub Title	
Author	岡原, 正幸(Okahara, Masayuki)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2022
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.27 (2022. 7) ,p.1- 6
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特集：青池先生と山岸先生を悼む～あの頃の三田社会学
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20220702-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

あのころの三田社会学

岡原 正幸

2020年3月21日と22日、山岸先生のお通夜と葬儀に参列させていただいた。その際に、ご一緒した浜さんや澤井さんと語ったのは、先生を偲ぶ会を是非とも秋にでも開きたいねというものだった。だがコロナ禍はそれを許さず。そして20年の秋に、2021年夏の三田社会学学会の大会シンポジウムの企画を幹事会で練る段になって、三田社会学学会会長である私のささやかな「わがまま」をみなさんに認めていただくことができた。

2020年といえば、新型コロナの年として記憶に残るだろうが、三田の教員にとっては、青池さんと山岸さんという文学部社会学専攻を、そして三田社会学学会を支えてこられた大事な二人の先生を失った年である。そこで、青池さんの大学院社会学研究科での教え子である李さんにもお手伝いねがい、お二人の先生を悼むという内容でのシンポジウムを企画して、2021年7月3日に開催することができた。



当日はお二人にゆかりのある大勢の方々から、三田東館の会場とオンラインを通じて、親密さゆえのエピソードが豊かに語られ、ひとつひとつに「師」というものに思いを馳せるきっかけとなりました。

山岸先生との個人的な思いは、ほんの一部ではあるが、『三田評論』2020年5月号に書かせてもらったので、ここでは、シンポジウムの副題「あのころの三田社会学」という視点で綴ろうと思う。僕は文学部出身ではなかったので、社会学の先生がたにお会いしたのは、大学院社会学研究科に入ってからである。それが1982年、それから数年の間を、おそらくこの三田社会学会が設立される前後までの自分自身の記憶を辿りながら、あのころの三田社会学を述懐しよう。ただ、三田社会学とはいえ、僕の記憶に頼るわけだから、触れることになる分野は限られるということをお断りしておく。いろいろな三田社会学があるのだ。

僕にとって、三田の社会学の興味は「現象学的」という語につきる。経済学部学生だったとき語学視聴覚教室（現外国語教育研究センター）でドイツ語のコースに参加し、その授業の担当者がウィーン大学で日本学を専攻する先生だった。彼にピーター・バーガーの著作を紹介され、そこで現象学的社会学なる立場を知り、興味を持った。卒業後、演劇学を学びにミュンヘン大学に進学するが、副専攻を社会学としたのは、この時のことがあったからである。

さて、帰国後進路に迷いを持ちながら、国内で現象学的社会学を学べる場を検索（といっても、今のデジタル検索ではなく、アナログに笑）してみたら、びっくり、灯台下暗しとはこのこと。文学部社会学専攻・大学院社会学研究科の先生がお二人も関連文献を著している。

おひとりには横山寧夫先生で1978年阿閉吉男退官記念論集に寄せた「現象学と理解社会学 A・シュッツと M・ウェーバー」。横山さんは、戦後すぐ慶應義塾に通信教育課程が作られた際に通信の専任教員として三田に着任し、文学部に移籍した後も、慶應通信のテキストとして『社会学概論』『社会学史概説』を著している。

そしてもうおひとりが山岸健先生で1977年に『社会的世界の探究』、1978年には『日常生活の社会学』を公刊しており、そこには現象学的社会学やその代表的な海外の研究者が触れられている。

社会学研究科を受験したのは、「慶應」という自分にとってのホームだからというのは確かだが、現象学的社会学の東のメッカ（西には山口節郎さんなどがいらした）が三田であるという事情もあったと思う。さらに言えばその前段階、今とは違って、演劇学などは、各語種の文学研究でしか手の出しようがなく、演劇と社会というテーマをドイツで知った「演劇社会学」に求めたということ、そしてドイツから帰国してすぐに（秋に）大学院入試を行っていたのが「ホーム」だったという事情もある。

さて、あのころの三田社会学に距離をとって眺めるような芸当はできないので、横山ゼミ、山岸ゼミ、そして荻野ゼミを中心にして話を進めようと思う。当時の大学院入試では、受験時に指導教員を決めておく必要はなく（学部の指導教員にそのまま指導をお願いするならば別だが）、経済学部卒業でそのままドイツで演劇学を学び出戻った僕は、合格発表後に、先生方の研究室を訪問し、指導をお願いすることになった。山岸さんとの指導教員をめぐる件は『三田評論』にある通りで、第一候補の山岸さんに「断られた」となれば、横山さんをお願いするしかない。横山さんには、ドイツ帰りの僕を「今年は誰も来なかったからいいよ」と

気軽にお引き受けいただいた。研究室225番（つまり今は僕が使わせてもらっている個室）での大学院授業が始まる。博士課程に吉澤さん（現象学・ルーマン研究）、長尾さん（フランクフルト学派研究）、修士2年生に今枝さん（ギデنز研究）、儘田さん（ヴェーバー研究）、そして僕という5人が金曜午後に集合。ときにパイプを蒸す横山さんを中心にして、各自の研究発表が進む。横山ゼミはその後、沢谷さん（ルーマン研究）と澤井さん（マンハイム研究）を迎えて、先生が退職なさる。澤井さんと私はその後、山岸さんの指導を受けることになる。横山先生の御嶽山（大田区）の御自宅での会食も定期的に行われ、奥様の手料理とワインで会話に華がさく。もちろん授業後の金曜の6時限目以降も、多くの場合、学生だけで仲通りで議論を続けた。

横山さんは授業を研究室で行っていたが、他の先生の授業は、もはや三田キャンパスにはない木造二階建ての第三校舎（大学院校舎）にある教室で行われていた。非常勤だった宮島喬さん、富永健一さんの授業もこの校舎で、とくに月曜5時限目に設置された宮島さんの授業では、助手に就かれたばかりの藤田さんも授業の常連だった（この時の経験があったので、僕も助手になったのち今田高俊さんの授業に1年間参加させてもらっている）。宮島さんも富永さんも、退官後（当時は国立大学は六十歳定年）は「慶應に来たいな」と洩らしていて、三田の自由な雰囲気えらく気に入ってもらっていた。ほぼ毎週月曜の6時限目は、宮島さんと参加者は仲通りの店で、宮島さんの大学院時代のエピソードやご家庭のプライベートなことまでを、社会学の歴史や理論的な推移、最新のフランス事情とあわせて終電近くまで話したものである。

富永さんとのエピソードもひとつ。修士2年次に富永さんの授業を履修し、夏休み前までは常に顔を出していたのだが、秋は修論執筆のために、ほとんど顔を出さなかった。学期末に富永さんより電話があり、こんど芦花公園の自宅で履修者の集まりがあるけど、顔を出せば単位を出すよと。迷った挙句、お断りした。それでも富永さんは「慶應での教え子」の末端に僕を据えていただき、ことあるごとに僕に声をかけてくれた。2013年三田での日本社会学大会の際にもそれは同じだった。

読者はお気づきの通り、あのころの三田社会学では理論研究が隆盛で、宗教学・人類学の宮家さんの指導も修士課程では理論研究、博士になって自分のフィールドをというものだった。社会学が流動化せず確固たる制度的なカリキュラム構造を暗黙のうちに有していたとも言える。まず、理論！ たとえ経験的な研究フィールドが違っていても、理論を踏む大学院生同士はその地平での共通言語を持ち、互いの研究への関心を欠かさなかった（潰しあうような批判合戦もあったかもしれないが）。

横山さんと同じく理論系でゼミをもっていたのが山岸さんである。1982年当時の修士課程では、草柳さん（ミード研究）、大西さん（ミード研究）、堀川さん（シュッツ研究）、貞岡さん（言語ゲーム論）、田中さん（デュルケイム研究）、その後にも、井上さん（ゴフマン研究）、鈴木さん（フランス社会学）や水川さん（エスノメソドロジー）、干川さん（ハーバマス研究）、西脇さん（クーリー研究）、森岡さん（法社会学理論）、菅野さん（ルーマン研究）、櫻井さん（ゴフマン論）、瀧上さん（相互行為論）、工藤さん（フランクフルト学派）など、やはり理論系が目白押しである。そしてそれ以上に、山岸さんの授業が特徴的だったのは、塾内の院生だけでなく、塾外の院生の拠り所にもなっていたと言うことである。

エスノメソドロジーから、好井さん（東大）と山崎さん（早稲田）、システム論で桜井さん（東大）はみなかなりの頻度で授業に参加し、やや上の世代で江原さん（都立大）、西原さん（早稲田）、那須さん（早稲田）などが三田に顔を出していた。通信教育課程で山岸さんの指導を受けた方々も授業に顔を出す。これらのひとたち、キャンパスに顔を出せば、三田の山を降りて、会食するのは当たり前で、そこでは、ありとあらゆる話題が飛び交うことになる。その語り合いについていだけで、知的好奇心は満足され、自分の頭の中に新たなアイデアが生まれる（生まれては翌日に消えると言うものも多かったけれど）。もう少しだけオフィシャルになって、何かにつけ研究会が院生主体でオーガナイズされるのも日常茶飯事だった気がする。原書の読書会という「正統派」研究会から、恋愛理論研究会まで、また主に那須さんの声かけで始まった自我論研究会などもあった。

僕にとって、あのころの三田社会学になくはならないのは荻野ゼミである。荻野恒一さんが1982年に文学部客員教授となり、大学院でも修士・博士の授業を、主に現象学的精神医学、文化精神医学というテーマでもたれていた。修士2年次に荻野ゼミに顔を出す。やはり多彩な顔ぶれだった。助手の宮坂さん（人間科学専攻）、慈恵医大で博士論文執筆中の精神科医中村敬さんのお二人が常連で、さらに、星一郎さん（都立梅ヶ丘病院）やソーシャルワーカーの方などが、大学院生に交じって、議論をする。その様子は、荻野先生が1991年に逝った際に、木田さんと一緒に著した追悼論文「出会いと迷い」（『哲学』1993）にも描いた。先生は一方で、ワーグナーのジークフリートについて語るかと思えば、目の前の人間を精神病だと思つて自分自身（医師）を現象学的に反省する姿勢を吐露、およそあらゆる参加者への柔らかな対応は、参加者自身の内発的な議論の成熟を促すものだった。授業後は、拡張前の桜田通りに面した居酒屋「べるでん」と当時田町駅前にあったワンショットバー「カドー」での議論が続く。酔ったなかでどれほどの議論が生まれては消えただろうか。また荻野さんの前職があった都立精神医学総合研究所の月一回の例会にも院生が連れて行かれた。荻野さんの調布のご自宅はいつからか自主的な研究会の場所になった。そこで出会った精神医学の専門家のみなさんは食欲に社会的な知を取り込もうとし、鋭い質問を投げかけてくる。僕はたとえば、レイベリング論などで反精神医学的態度を見せていたと思うが、しょせん理念的な立ち位置でしかなく、彼らの現場で活かされる知と態度の研ぎ澄まされる躍動には大きく影響されたものである。

荻野ゼミにいたことで、「現象学的」の意味は、僕にとって、行為者の日常生活世界の構成に注目するよりも、研究者である自分自身が世界を、他者を、自己をいかに経験し、その経験を構成しているのかという視点に完全に移行する。なぜ私は世界をいまあるような世界として経験してしまうのか？ なぜ社会学者として世界をそのように経験するのか？ それを問題化する視点は、ちょうど1980年代の、ポストコロニアル、他者表象の危機、知のポストモダン、脱構築といった潮流の中で、僕自身の基本視線を形作ってしまったと思う。

さて、ここでは紹介しなかった（あるいはもっとふさわしい書き手がいるので）三田社会学の流れに、生活史、生活誌、ライフストーリーへの着目がある。中鉢さん、川合さん、有末さん、浜さん、小倉さんや高山さんなど、研究の蓄積や業績はおびただしい。ひとが生きる、その主観的な世界を描出しようとする意志は、ある意味、現象学的な態度と通ずるような気もするし、聞き手となる研究者が自分の営みを反省しつつ、小倉さんの言葉で言えば「らせん的」に、研究という出来事にかかわる人々の生が積み重なる姿は、フッサールまで行かなくても、十分に現象学的だと思うのである。

最後に、今現在、社会学研究科の委員長として、若手研究者の育成に携わっている身から思うところを述べさせていただければ幸いである。コロナ禍で、多くの学生が自分自身の研究にどのくらいマイナスの作用を受けたであろうか。キャンパス閉鎖、図書館、資料館の閉鎖、調査地へ行くことも、調査に協力してもらえる人々との関わりも最小限に限定され、もちろん、研究会や学会そのものの中止も続いてしまった。いま「あの頃の三田社会学」を綴る中で、気づいたのは、懇親会、飲み会、コンパといった集まりが大きな発震源として研究活動を前に押し出していたのだということである。読者の中には、三田界限で酒宴ばかりの生活を送っていて、いったいいつ研究していたのか？と思われるかもしれない。だが、研究というある意味では孤独な生活に、他者の声は絶対に必要であり、それも学会という場での合理化された意見ではない、ナマモノとしての声が大事なのである。ナマモノは始発の電車と共に消え去るけれど、ナマモノは確かに身体に摂取されていたのだろう。言うまでもなく、ポイントはアルコールではない。みんなが集まる、ただそれだけのことが持ちうるだろう潜在的な創造力である。

JSTによる次世代研究者挑戦的プログラムが2021秋に始まった。慶應義塾は博士育成プログラム「未来社会のグランドデザインを描く博士人材の育成」を提案し、それが採択された。社会学研究科は慶應義塾のコアプログラムの企画・運営を担う。この支援プロジェクトでは、博士院生が生活費と研究費を支給されると共に、塾14研究科の博士院生に、多様な育成プログラムが提供される。社研は、アート表現・デザイン・コミュニケーションを柱にして、レクチャー、アートワークショップ、映像ワークショップ、フィールドワークなどを研究科横断プログラムとして実現する。企画運営の責任者として、他研究科をはじめ塾内外の多くの手を借りて実施するこのプログラムには隠れテーマがある。それは14研究科の院生が身体的に対面するということである。コロナ禍で失われたナマモノをやりとりする場に、若き研究者を連れ込むということである。「あの頃の三田社会学」の雰囲気や風土を、21世紀の慶應義塾全体に広めようとする、僕の「画策」である。

本特集では、大会シンポジウムでの登壇とは別に、お二人の先生にゆかりのある方々に、お声かけしました。みなさんの原稿には先生との思い出が詰まっています。その思い出のありようから、あの頃の三田社会学に思いを馳せていただければ、嬉しいです。

(おかはら まさゆき 慶應義塾大学文学部)



山岸先生からの授業配布資料の一例。このライフの痕跡に僕たちは常に惑わされ、魅せられ、光なき灯火を求め、迷宮入り一步前で踏みとどまってきたような気がする。